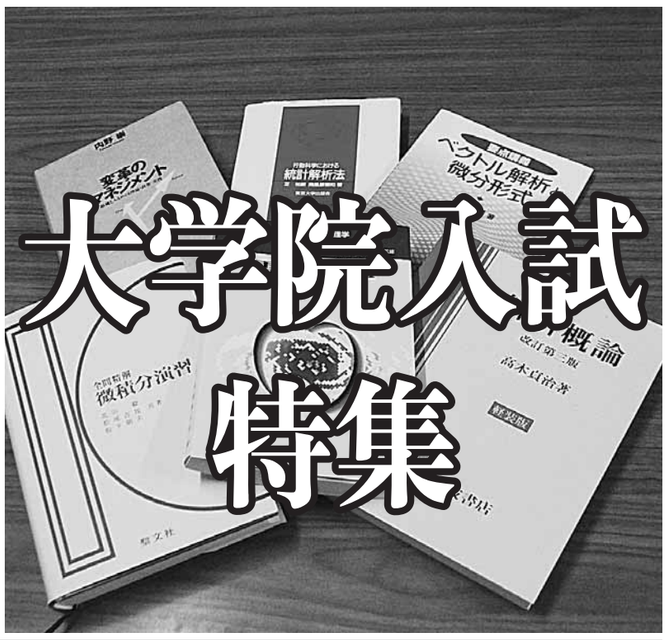
大学院入試特集

そろそろ、主要大学の大学院入試の出願が始まる時期になった。読者の中にも、大学院への進学を考えている人もいるだろう。だが、あまり馴染みがなく、よく分からない学生も多いに違いない。そこで今回は、大学院入試について紹介する。



理解しよう受験のいろは

私達学生にとって、進路先の一つである大学院。多様な試験を突破して入学するために、必要な知識を身につけよう。

まずは、自分の希望する大学院の出願資格は何かを調べることが大切である。例えば、本学には法科大学院と法学・政治学・経済学・経営学・人文科学・自然科学の七つの研究科がある。来年の各科の受験条件は、学校教育法第83条に定める大学の卒業者、または平成24年3月31日までに卒業見込みの者だ。他にも様々な出願資格があるが、以上が学部生にとって一番満たしやすいはずだ。

それでは、入試制度について、本学を例に見ていこう。初めに注目すべきは、募集人数だ。今までの高校や大学入試とは異なり、約2名から50名程度と少人数で狭き門となっている。入試の中身は主に書類審査と筆記・面接試験の三つに分かれている。試験が実施される期間については左の図を参照していただきたい。

＜秋入試（春入試）＞

1月（7月）	5月（11月）	7月（2月）	10月
復習期間	実戦期間	入試	
過去に出題された問題で傾向を調べて、各教科の総まとめを行う	実際の試験に向けた対策を行う。募集要項を取り寄せ願書を提出		

最初の書類審査では、履歴書や最終卒業校の成績証明書、志願理由書などを期日までに提出しなければならない。他にも任意書類というものがある。優れた成績を一緒に出せば加点されて、選考時に他の受験者よりも優位に立てる。積極的に自分の能力をアピールしていこう。ただし、研究科ごとに課されている書類には違いがある。直前になって慌てることのないように、入試要項をよく調べておきたい。先ほど挙げた数々の書類の作成には、時間が掛かる場合も予想される。そのため試験日程から逆算したスケジュール管理が不可欠だ。

学力を問う筆記試験は、各大学院でそれぞれ特化した問題が出題される。それに加えて、研究科によっては英語をはじめ、外国語の受験も要することがある。これらの試験に、どう対策しようか悩ましいところだが、過去の入試問題が手に入ることをご存知だろうか。本学のアドミッションセンターには全ての専攻の、過去3年間で実施された問題が置かれている。また、そのコピーを取ることもできるので、進学希望者はぜひ活用しよう。最後に行われるのは面接だ。質問事項や体制などは研究科や面接を担当する教授によって異なるが、内容は受験科目の口述試験が中心だ。

以上、三つの成績の総合結果によって、合否の判断が下される。それが大学院側が指定する合格ラインに届いていないと、募集人数に達していなくても入学が許可されない場合がある。くれぐれも油断は禁物だ。

本学の大学院のHP上には、入試説明会などの情報も記載されているので、こまめにチェックをすると良いだろう。こうした事前の準備を怠らずに、万全の状態で試験に臨めるようにしたい。（松江祐実）

一日院生体験

大学院ではどのような授業が行われているのだろう。そこで、人文科学研究科身体表象文化学専攻の大貫敦子教授による「身体表象文化論演習　身体の表象とジェンダー」を受講してみた。

教室は机が四角く並べられ、対話しやすくされている。学生は20人弱で、講義はプリントを中心に進められるが、机上には各自が持ってきた参考文献が置かれていた。この講義は、ジェンダーについての論文を一人の学生が内容を要約して説明していく形式となっている。今回は、男性の社会における女性の存在のあり様について議論が行われた。強い連帯関係を持つ男性の集団の中では、女性は男性自身が異性愛者であることを表明するための道具にされるという学説がある。その具体的な事例は様々な分野にみられ、企業の表彰パーティーで対象社員の妻子が呼ばれる話や、漫画に登場する男女の人間関係が紹介された。教授がその他の例を挙げるように促すと、あちこちから声が上がり、積極的な発言がなされていた。提案された例に対する同意や反論が次々と行われ、議論は非常に活発である。そして時には教授が助言を挟み、解釈を訂正していく。演習という発表や議論が主となる授業ではあるが、こうして解説がつけ加えられるために、見識を広めることができるのだ。

誰もが真剣な表情だが、教室の雰囲気は和気あいあいとし、笑い声が上がる時もあった。遠慮することなく発言し、意見を交わしている。終了のチャイムが鳴っても片づけを始める様子はなく、皆じっと話に耳を傾け続けている。そして論文のまとめが述べられると、教授が総括をし、授業が締めくくられた。その後も教授と学生が会話を楽しみ、和やかな様子である。

大学院の授業は、積極的に発言することが求められるが、その分自身の考えを発展させられるものだった。大学院に入ったら怠惰は許されず、入念な予習と真剣に授業に臨む姿勢が必要になるだろう。しかし、そうした環境だからこそ、自分の研究分野をさらに専門的に学ぶにはぴったりなのである。（久木元香織）

院生から見た入試とは

ここまで大学院入試の制度を学んだが、実際はどのようなものなのだろうか。本学の大学院生約40名を対象にアンケートを行った。

初めに、進学を考えるようになったのはいつ頃なのかを聞いてみると、4年次からという回答が最も多かった。一方で高校生の頃や1年次から、という意見も目立つ。大学院への進学も視野に入れて高校や大学での勉強に励んでいたのであろう。では、入試に向けた準備を始めた時期はいつなのだろうか。この問いについては、4年次が一番多く、次に3年次であった。1年次からと答えた人は学内推薦枠の取得やFTコース選抜に向けて普段から地道に勉強を行っていたようである。

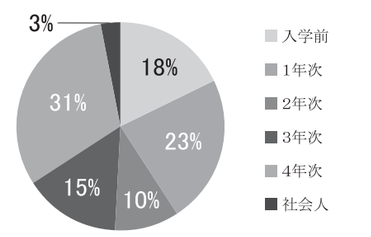
そこで、入試の対策はどのように行っていたのだろうか。具体的に尋ねると、外国語では専門用語の理解や長文読解の勉強を重点的に行った人が多数であった。専門科目では過去の入試問題を解くことや今まで学んだ内容の復習を行い、基礎を固めることが重要であるそうだ。口頭試問では文献を読み込み、自分がどのような研究をやりたいかをしっかり伝えられるように準備したという。ここで、最も大変だった試験は何だったかを尋ねたところ、口頭試問を挙げた人が多く見られた。「何を聞かれるのか不安」「自分の研究を説明することが難しい」など、教授からの質問に苦労したようである。専門科目に関しては「勉強の範囲が広い」「理解していないと答えられない」との回答があった。

ここまで見ると、入試において受験生に求められるレベルの高さがうかがえるが、そのために予備校に通った人は少数であった。予備校では英語などの授業の他、研究計画の指導を受けることもできる。また、自分の相対的な位置づけが分かることでモチベーションを上げられるという利点があるそうだ。しかし、大学受験と違い、独学で準備をする人が多いようである。

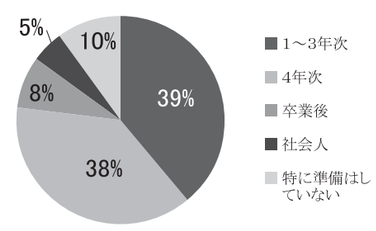
それでは、大学院での授業は実際にどのようなものなのだろうか。少人数であることや、大抵の授業が参加型であることを挙げた人が多い。「まさに『勉強』をしていると感じる」という意見もあり、講義形式の授業が多い大学との違いを感じる結果である。

大学院生アンケート集計結果

進学を考えた時期



入学の準備を始めた時期



合格への道筋を探る

本学の大学院入試と現役院生の意見を垣間見たところで、実際に近年の入試事情はどうなっているのだろうか。株式会社デルタプラス代表取締役の湯川彰浩氏にお話を伺った。

初めに「10年ほど前の大学院は大学の延長線上にあり、研究者を志望する人が目指す機関でした。しかし、最近では社会人の方の入学者数も増えてきています」と湯川氏は語る。その理由として「大学院で学んだことを仕事に活かしたいという動向が表れている気がしますね。つまり、大学院の先に、専門の職業があるという構図になっています。そのため、専門職に就きたい方が進む機関になってきていると思います」と大学院のイメージ像の変化について説明してくれた。例えば、法曹試験は法科大学院課程を修了しないと基本的には受けられない。このような職業選択の関係もあり、学生だけでなく社会人の受験者も増え、総受験者数は増加傾向にあるようだ。また「夜間や土日に開講するなど、仕事と勉強の両立が可能な大学院が増えてきているので、社会人のニーズが高まっています」とも話す。今後もこの傾向は継続していきそうだ。

進学について指南する湯川氏

大学院入試と我々が経験してきた大学入試の出題内容はほとんど同じように思われるが、具体的な違いはあるのだろうか。出題について「基本的にはどの科目も専門性が高いです。英語であれば論文から引用した長文を全文和訳、要約などの優れた英語力が問われますよ」と湯川氏は語る。つまり、総合力が問われるのだ。続けて「入学後は外国語の文献を読む機会が多くなるので、その力が試されています」と氏は語る。やはり専攻に沿った内容になっているようだ。さらに「研究計画書というものがあり、面接にも使われるので非常に重要です。学生であれば、卒業論文を踏まえて今後の研究内容について書くこともあるでしょう」と教えてくれた。研究計画書とは、就職活動で使うエントリーシートのようなものだ。書き方は異なるが、面接において影響力を持つという点は同じである。

大学院は最終学歴になるため、名前の通った研究室に入りたいと誰もが思いがちだ。そこで大学院の選び方について聞いてみると、「大学院名で判断するのではなく、自分が何の研究をやりたいのかが大切です。その方向性と近い研究を行っている教員や教授のいる大学院を選びましょう」との回答を得た。先にも述べたが、大学院はより専門的な研究を行う所である。従って、希望する学問の方向性がズレてしまっては意味がないのだ。そうならないように情報収集をしっかり行い、各先生方の研究内容を事前に調べておく必要がある。

最後に、大学院入試を考えている学生に対して湯川氏は「論文や専門書を熟読し、自分の取り組みたい研究を見定めることが重要です」と話す。加えて「自発的に入試説明会に参加し、研究室の雰囲気を感じ取ってください。そして過去の入試問題を入手し、問題研究を行うことで、出題の傾向を掴むことが大切です」とメッセージを残した。

大学院受験は大学受験とは異なり、準備が遅すぎるということはない。進学を希望する全学生が有意義な修士課程を過ごせることを願っている。（山田晃）

最後に、受験生へ「進学後の進路を考えた上で受験すると良い」というアドバイスがあった。また「大学以上に自己の向上心が必要だが、その分可能性を広げられる」と大学院の魅力も教えてくれた。進学するにあたり、自分の進路についてしっかりと考えた上で、目標を持つことが必要であるのだろう。

大学院進学を目指している人にとって、大学院生の意見は貴重なものだ。私自身もそのように感じた一人である。大学院入試に不安を感じても、先輩方の経験を参考に頑張ろうではないか。（新城亜美）

記者の眼

新たな可能性を求めて

長引く不況と震災の影響で、学生を取り巻く就職環境は非常に厳しいものとなっている。その中で、来年の卒業予定者は就職活動に励んでいるが、一方で大学3年生を主とする、再来年に卒業予定の学生も早めに意識して取り組んでおく必要がある。依然として続くであろう不景気に加えて、今の就活生よりも過酷な状況に置かれるとの予測もあり、まだ先の話だとは言っていられない。

では、これから就職活動を始める学生はまず何をすれば良いのだろうか？　本学のキャリアガイダンスや就職関連の本によると、就職活動をスタートするにあたって、最初に取り掛かるべき作業は、自己分析である。自己分析とは、己を知るために、自分とはどのような人間なのかを考える作業のことだ。分析の進め方は様々であるが、一般的に、過去・現在・未来という時間軸で自分を整理して見つめ直すという手法が取られる。今までの出来事を振り返り、己の長所や短所、性格を探って、将来のイメージを描いていくのだ。

就職活動において、その目的は第一に、仕事を選ぶ際の選択基準を持つことである。自らの強みや価値観を知ることは、やりたい仕事を見つけることに繋がるためだ。これは雇用のミスマッチを防ぐためにも必須である。第二に、エントリーシートと面接試験の対策だ。自分自身を理解しておくことで、選考の材料となるこれらに余裕を持って対応できるのである。

自分を知ることの難しさ

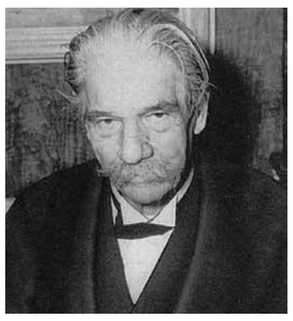
自己分析は適職を見つける上で有益であるが、気をつけなければならない点もあると考える。それは、実のところ、自身がどのような人間で、何がしたいのかを明確にするのは困難だということだ。まして、学生時代という短い期間にそれを見出せる者は稀であろう。探究することは良いが、突き詰め過ぎて抜け出せなくなることがないよう、自己分析を行う目的を常に心に留めておきたいものだ。

そして自分とは、絶えず変わっていく存在である。ある時点でそのような曖昧な自身を理解できたと思っても、それで適職を決めてしまうのは危険であろう。私は高校生の頃、人付き合いがあまり得意ではなかったため、人とは関わらない仕事が適職だと思っていた。しかし現在は、部活動やアルバイト等を通じて、人と接することが苦手ではなくなり、職業選択の幅が広がったのだ。このように性格や考え方は変化するものであるから、分析によって導き出された自分像やビジョンに縛られて、可能性を狭めてしまわぬように注意する必要があるのではないだろうか。

己を知るために自らと向き合うことは、この期はもちろん、生涯続けていかなければならない大切な行いである。そして、自己分析から始まる就職活動は、そのための絶好の機会を与えてくれるだろう。思うように上手くいかず、心が折れる時もあるだろうが、就職活動をただ苦痛だと捉えるのではなく、前向きな気持ちで取り組んでいきたい。（政治学科3年　高橋弘一）

Tell Me! 偉人 シュバイツァー

Lesson 12



飽くなき平和の追求

1953年、一人の医師がノーベル平和賞を受賞した。「密林の聖者」と称された、アルベルト・シュバイツァーである。彼は、医療を通してアフリカの人々に貢献し、世界平和のための啓蒙運動を行った人物だ。

シュバイツァーが自身の人生において最も重要な決断をしたのは、21歳の時だ。キリスト教の信仰に篤く、慈悲深い彼は、自分は不幸な人々に尽くすべきだ、と思い立つ。30歳になるまでは己の好きな音楽と学問に励み、その先は奉仕活動をしようと決めたのである。決意は固く、若くして大学教授やオルガン奏者などの地位を得ながらも、医療体制の不備に苦しむアフリカの人々のために医師になった。そこでの活動は過酷なものであったが懸命に働き、現地では欠かせない存在となっていく。二度の世界大戦により一時的に活動が困難になるも、彼はこうした逆境に負けることなく献身を続けた。そして、核開発の動きが活発になると、人類の健康と未来のために核廃絶を世界中の人々に向けて訴えかける。各国の意向と異なっていたために非難されたが、奇形児の誕生など核実験による悲劇も目にしてきた彼はその主張を曲げず、叫び続けた。やがて核を批判する世論が広まり、部分的核実験禁止協定が結ばれた。こうして核撤廃に向けた第一歩が踏み出されたのである。

困難な状況にも屈せず、己の信念を守り抜いた姿には感銘を受けずにいられない。自分の意思を貫き通すということは難しいもので、人生にはどうにもできない壁にぶつかる時もある。だが、彼の不屈の精神を見習い、どんな時も諦めることなく前へと進んでいきたいものだ。（久木元香織）

編集後記

一昨年、弊紙にて大学院を扱ったが、今回は「入学試験」に的を絞った特集を組んだ。実際、大学院への進学について興味はあるが、入試の情報を持っていない学生も多いのではないだろうか。私自身、入学当初から大学院を目指してきたが、具体的な対策を考えたことはなかった。

大学院は本気で対策すれば、約半年の期間で合格圏内まで学力を伸ばすことができる。以前から進学を考えていた学生にはもちろん、そうでない方々に対しても大学院は一つの進路。この号が自らの将来を見つめ直すきっかけとなることを期待する。（山田晃）

企画　山田晃
構成　伊藤友喜
レイアウト　松江祐実
取材　大久保吉章
久木元香織
郡山陽一郎
新城亜美

秋期から「毎日学べる英会話」講座を開講します

■2011年度9月より「毎日学べる英会話」（外国人講師）がスタートします。

この講座では，講義の空き時間を利用してネイティブ講師の指導の下，学内で1日40分の英会話レッスン（50回）を受講することができます。

日常の様々な場面や旅行，留学などで役立つ表現を学びながら，英語による実践的なコミュニケーション力を養います。就職対策としても是非お勧めの講座です。

開講期間　9月26日（月）～12月12日（月）　時間　9時50分～18時40分の中で40分
曜日・回数　月～金　全50回　受講料　学習院の学生・生徒　65,000円（予定）

【講座ガイダンス】
ガイダンスを以下のとおり実施します。興味のある方は，まずはガイダンスにご参加ください。
（全ての回，同一内容です）
日程　6月9日（木）、14日（火）
時間　①12時15分～　②14時40分～
③16時20分～　④17時30分～（各回40分）
場所　学習院大学　東別館2階204教室

学習院生涯学習センター　キャリアスクール
〒171-0031　豊島区目白1-3-19（目白キャンパス西11号館）
Tel:03-5992-1040　Fax:03-5992-1124　URL:http://open.gakushuin.ac.jp/